

季刊 連句 第41号



連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判
三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録しました。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 季句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鷗沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重宝なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などを収め、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学全編
B5 一八〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大三編
A5 六〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石大三編
B5 三〇〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編
B5 三〇〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸以他編
B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口 堀井編
B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 實編
B6 三〇〇〇円

隠語辞典 堀井 實編
B6 三〇〇〇円

近世上方語辞典 前田 昌編
A5 五〇〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井 幸以編
B6 一八〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井 幸以編
B6 一八〇〇円

難訓辞典 中山 善編
B6 一八〇〇円

名乗辞典 荒木 典編
B6 一八〇〇円

名数数詞辞典 藤原 幸編
B6 一八〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 善編
B6 一八〇〇円

新版ことば遊び辞典 鈴木 三編
B6 一八〇〇円

類語辞典 鈴木 三編
B6 一八〇〇円

類義語辞典 徳川 富編
B6 一八〇〇円

表現類語辞典 藤原 幸一編
B6 一八〇〇円

新版文章表現辞典 神島 村松編
B6 一八〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-3233-3741~2

K氏からの手紙(南柏雑記39)	1
半歌仙「初昔」の巻異論	東 明雅 ... 2
「灰汁桶の」の巻 鑑賞(Ⅲ)	東 明雅 ... 6

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第四十五回 猫蓑会	9
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻「藤祭り」 捌・文 副島久美子	
第二部 二十韻 十巻 捌 東 明雅・岩井啓子・真田光子・杉内徒司	
杉江杉亭・副島久美子・橘文子・中島啓世	
中田あかり・若尾よしえ	
文 内田麻子・中田あかり	

「馬追」付勝練習二十韻	東 明雅 ... 18
-------------------	-------------

A・C・C「連句入門」講座紹介	
発句の練習	秋元正江 ... 20
連句の成立ち	式田和子 ... 22
付勝二十韻「飛行船」	捌 秋元正江 ... 23

歌仙三巻 捌 東 明雅・杉内徒司・秋元正江	24
芦丈翁俳諧聞書(Ⅷ)	26
二十韻三巻 捌 田村満子・岩垂景翠・本田八重子	28
新刊紹介	25
雁帛往来	29

表紙(軍鶏) 宮崎龍火子

K氏からの手紙
南柏雑記 39
雅

「拝呈 このたび猫蓑作品集Ⅲを御恵送いただき、恐縮に存じます。

二十韻『躁鬱』の巻なつかしく再見しました。若い人達の作品中に置かれると、稍クラシカルですね。私を對手とする両吟では致し方ないことですが――

序文中の「近ごろは連句を遊びとだけ考えて無心所着、付味も転じも考えない作品」が多くなつたとの御指摘、最もわが意を得たりの感があります。

手許の連句年鑑十冊をざっと眺めても、いまだに目を蔽いたくなるような作品が多いのは困ったことです。

このごろ考えているのですが、素人の遊芸とプロの宗匠との中間に、スペシャリストとしての一線の白道があるだろうということ。私も明雅先生に負けないで、芭蕉翁に西三十三箇国の俳諧奉行と言われる位に精進したいものです。古稀をむかえての私の覚悟です――後略――

右は関西に住む私の心友K氏からの書簡の一節である。猫蓑が連句年鑑から脱退して、毎年独自に「猫蓑作品集」を刊行し、今年で三年に及んだその真意を理解して下さる有難い手紙である。問題はどのように私たちの真意を理解して下さる人が、この天下にまだ極めて僅かという点に存

在する。

現代の連句は、大正から昭和初年にかけて一部の好事家が、芭蕉からの伝統も知らずに自己流に始めたものが、その弟子、孫弟子どもによりさらに歪曲された形で、時を得顔にはびこっているのである。現在、連句の作者という人の大部分は、はっきり言えば子規とか虚子とか、俳句の道ではえらいだろうが、連句ではその伝統はもちろん、原理も知らなかった者の弟子、孫弟子たちで占められている。これでは芭蕉が折角一生をかけて完成した俳諧とは、全く別物になってしまっているのは、むしろ当然ではないか。

連句年鑑十冊が目を開いたくなるような作品でみちみちているのも当然であるが、現在の連句界でこのことに気がついていない人もすくないというのもまた事実である。

私は今までこのような現状に対して、あまりにも寛容でありすぎた。これからは本誌に掲載した「半歌仙『初昔』の巻異論」のように、目についたおかしい作品については遠慮会釈ない批判を加えたいと思う。これによって私は多くの人から憎まれ、怨まれるであろう。しかしながら、喜寿を過ぎた余命を考えると、のんびりしてはおられない切迫した気分が、私を駆り立てるのである。それは、一部の連句人の憎しみの的になっても、芭蕉の残したすばらしい俳諧という芸術をそのまま後世に伝えたいからに外ならない。

半歌仙「初昔」の卷異論

東 明 雅

平成五年一月二十四日、現代連句シンポジウム「現代詩人による公開連句実作と討論」が東京九段下のホテル・グランドパレスで開催された。パネラーに高橋睦郎・水野隆・別所真紀子・小沢実の諸氏、司会は川野蓼艸氏・山地春眠子氏で、半歌仙（八句目までは下俳諧）が興行され、その経過・結果は「俳句研究」四月号に発表されている。

第三は八仔猫▽で春と、支離滅裂ではないか、というご意見が真っ先に出るのではないかと思います。その点について、捌の水野隆さん、お願いいたします。水野 初昔雅は色をこのむより 化粧はつかに水仙の空

私は当日、他に所用あって出席できなかったが、この報告を読んで疑問に思う点があるので、その一端を後ればせながら、捌きの水野氏に御質問したい。お答えいただければ幸いである。

発句は高橋さん、脇は私です。たしか元禄二年に芭蕉の巻いた「水仙はの巻」という一巻があり、△水仙は見る間を春に得たりけり路通▽△窓のはそめに開く歳旦季春▽△我猫に野良猫とをる鳴侘て 翁▽が最初の三句ですが、最初△水仙▽で、わざわざ春と断ってありますから「春」、続いて△窓のはそめに開く歳旦▽で「正月」です。そして△野良猫通る鳴侘て▽で、「とをる」は通ってくるという意で恋猫、春です。昔はこういう俳諧もあるわけです。旧暦では正月も春ですから、きょうは旧暦での春三句で現代的な考え方では少しばらばらな出だしにしました。

まず、この巻の発句から第三までを一読して、
初昔雅は色を好むより 睦郎
化粧はつかに水仙の空 隆
屋上に子猫と月と笛吹きと 真紀
季の取扱い、その他に奇異の感がしたが、これについては、司会の川野氏が直接その場で水野氏にたずねておられるので、以下、それを引用する。

これです、現代連句において、旧暦で作られた明治以前の歳時記と新暦による現代の歳時記とを同じ一巻の中で併用してよいか、否かが問題である。というのは、この巻ウラの六句目・七句目・八句目にわたって、季戻りの説明

がある。

ウラ六句目 まづ箸付ける飯のぎんなん
ウラ七句目 ふところに骰子入れて月の山
この句に対して、「をとこと西瓜いつもはづれる」という句を付けたのに対して、
—△ぎんなん▽は晩秋、△西瓜▽は初秋で、季戻りになりませんか。

川野 季戻りについて初めての方に説明しておきます。歳時記では「ぎんなん」は晩秋、「西瓜」は初秋になっています。そうすると、晩秋から初秋に戻るのではないかと、こういうのを季戻りといっています。いいことになっていきます。

とあるが、△ぎんなん▽を晩秋、△西瓜▽を初秋というのは、現代の歳時記によっているわけで、明治以前の歳時記、ことに、芭蕉らが用いたと思われる古い歳時記では、△ぎんなん▽は仲秋であり、△西瓜▽は旧暦六月であるから晩夏である。だとしたら、この一巻では、ある場合には旧い昔の歳時記を用い、ある場合には新しい現代の歳時記を用いていることになる。

このようなことは不都合というより、捌くその人が大変であろう。ビルを建てる時、メートル法の物指しと日本古来の尺貫法による物指しとを混用するようなもので、その不可なることは申すまでもあるまい。発句の「初昔」を春の句と考えることは誤りである。許されないことである。次に同氏は脇の句「化粧はつかに水仙の空」について、

元禄二年に芭蕉によって巻かれた「水仙はの巻」の例を証拠に、春の句としておられるが、「水仙」は「はなひ草」以下、「誹諧初学抄」・「毛吹草」・「山之井」・「増山井」・「番匠童」など、芭蕉が使ったと思われる歳時記には、すべて、十一月又は初冬となっている。これが明治以後の新しい歳時記では晩冬となっており、ともに、絶対に春の季語ではない。元禄二年の歌仙の発句「水仙は見る間を春に得たりけり」とは、水仙は冬の季語であるけれども、花の季節が長いので、春を迎えてもなお花が見られるという意味であり、この句が春になるのは、「春に得る」という詞があるからに外ならない。

水野氏の脇の句「化粧はつかに水仙の空」とは、水野氏の自解によれば、「水仙の咲くころの空がかすかに化粧したようだ」という意味であるという。ただそれだけならば、この句は絶対に春の句にはなりえないだろう。さらにこの脇句については、別に問題がある。「俳句研究」の文を更に引用すれば、
—脇句が△化粧はつかに水仙の空▽なのですが、△化粧▽に恋句のような感じがしないでもないのですが、オモテ六句にそういう感じが許されるかどうか。
という質問に対して同氏の答は、
水野 まず発句が△雅は色をこのむより▽と、すでに恋句なんです。ですから発句をうけて、恋句であって、なおはっきりと恋らしくない句を付けたつもりです。空がかすかに化粧したようだということ。恋句とはいえない

いと思いません。

となつてゐる。水野氏が発句を恋句だと見られたのは正しかった。それはそれでよいのであるが、それなら発句が恋句である場合、脇句はどうすべきか、ここを十分に御存知なかつたのではあるまいか。「発句を受けて、恋句であつて、なおはっきりと恋らしくない句を付けたつもりである」と言われるが、なぜ、そのように余計な遠慮をされたのであろうか。蕉風連句では、表六句には神祇・釈教・恋・無常その他特に印象の強いものは遠慮することになつてゐるが、発句だけに限つては、この制約はないのである。発句は神祇でも釈教でも、恋でも、無常でも、あるいは地名、人名でも自由に出すことが出来る。そして、もし、発句に恋が出たら、脇では必ずこれに應じて、恋句を付ければならぬ。たとえば発句が神祇であつた場合には脇も神祇で付け、釈教であつた場合には釈教で受けてもよいことになつてゐる。しかし、恋句の場合に限つては、恋は一句で捨てるなという大原則があるから、発句が恋句の場合、脇は必ず恋句を付けなければならないのである。それなのにどうして、水野氏は「恋らしくない句」を付けられる必然性があつたのか、最後に「恋句とはいえないと思ひます」と言われなければならないか、最後は「何をか私とすれば、はっきりここで発句の恋の情を受け、二句相俟つて美しい恋句の一連を作つていただきたかつた。作つていただかなくてはならないところであつた。それを水野氏が殊更に避けて「恋句とはいえないと思ひます」と言われる

の作品で、第三をて・に・にて・らん・もなし以外で留めたのは、すべて脇がてには留めの場合で、例外は僅か二つにすぎない(ひさご・猿蓑)。しかも、この二つはともに浜田珍碩の作品であるのが注目される。珍碩は何故にこのような異風を好んだのか、外の人たちはみな師の教えを守つて、格外なことは誰もやつていない。

しかるに、現代の連句では、新をほこり、奇をてらつてか、理由もなく別の留め方をする人が多くなつた。極端な例を一つあげれば、昨年の第七回国民文化祭石川大会で入選第一席の文部大臣賞を見ても、

炎天を風のごとくに薄れゆく

簾の目より洩るる琴の音

卓上に放置されたる招待状

と、第三にわざわざ文字留め(韻字留め)が用いられてゐる。この場合は脇の句も文字留めであるから、て・に・にて・らん・もなしの、普通の形に留めるのがあたり前であるのに、わざわざ、第三に文字留めを用いて、懐紙面を殊の外悪くしたのは何故であらうか。懐紙面というのは、脇・第三と同じ文字留めが並んで見場が悪いというだけでなく、発句の上五と第三の上五とが、いずれも、△炎天を▽・△卓上に▽とこれも似た形が打越になつてゐるところにも問題がある。これをひっくり返せば、

招待状放置されたる卓上に

となり、懐紙面もよくなるのに、なぜか、わざわざ、平句まがいの第三を作つて、当人は新しさをてらうつもりであ

のは疑問であり、不満でもある。

次は第三の留めに関する問題である。まず、第三は大体に留め・て留め・らん留め・もなし留めなどの語で留めることに決つてゐる。そのことは、ちよつとでも俳諧を蓄つた人なら、皆承知してゐることだろう。

第三の留字がこのように定まつたのは、連歌の宗祇の頃からと言われているが、その前から、これらの形の留めが圧倒的であり、それがそのまま俳諧に伝つて、嚴重に守られて来た。そして、その為に自然と一種の風格が生じ、百句の中に混ぜても、この形の留め方をしたものは丈高く第三であると、指摘出来、その反面、外の留め方を使えば、同じ句でも何か安っぽく、平句めいて聞える。たとえば、二番草取りも果さず穂に出る

股引の朝からぬるる川こゆる

などと言つた場合、意味は全く同じながら、

二番草取りも果さず穂に出でて

股引の朝からぬるる川こえて

と比べてみれば、風格の差、いわゆる第三体としての形と意義とがはっきりするだろう。

ところで、何故にこの、て・に・にて・らん・もなしが使われるようになったか、これを説明したのが「俳諧無言抄」で、「脇の句は大体において文字留め(韻字留め)であるから、その続きに第三も文字留めが並んで懐紙面が見苦しくなるから、て・に・にて・らん・もなしなどの軽い仮名で留めよ」と言うのである。そう言えば芭蕉七部集

るうが、全く逆効果である。

当人はあるいは第三の作り方など一切頓着しなかつたのかも知れない。しかし、これが入選第一席に選ばれるとなると、撰者が撰者であつただけに、あたかも第三の留めの慣わしは守らなくてもよい。あるいは第三の留めなどは作品審査の条件にはならないと、天下に向つて公表したような破目になり、大いに初心者を惑わした例がある。

これは結局、その撰者の不見識として非難されたが、今度のシンポジウムも「昭和、平成を通じて最高の作品が生まれる」と連衆も一般聴衆も期待したと言つたのであれば、慣わし通り、「笛吹きと子猫と月と屋上に」としないで、「屋上に子猫と月と笛吹き」と、わざわざ第三らしからぬ、平句めいた句作りにした狙いと効果について説明して欲しかった。

要するに、第三の留めを問題にするのは、大切な第三をいかに丈高く、風格あるものにするかという為めである。はっきりした理由もなく、勝手な留め方を容認すれば、必ず、連句の芸術性の否定、もしくは破壊につながるであらう。こんな放埒を許しておけば、やがては発句に切字を入れないでもよい。花は桃でも梅でも椿でも何でもよいといふことになつて行くだろう。私はそれが恐いので、敢て「鬼の舅」になり、苦言を申し上げる次第である。失礼と思われる発言があつたかも知れないが、私の意のある所を酌んで、フランクな御返事をいただければ幸甚である。

「灰汁桶の」の巻鑑賞(Ⅲ)

東 明 雅

摩耶が高根に雲のかゝれる
ゆふめしにかますご喰へば風薫

水 兆

(現代語訳) 夕飯にかますごを食っていると、摩耶山に夕立雲がかかって、気持のよい風が吹いて来る。

(付心・付味) 起情の句。時節の付。時分付。前句の摩耶山に雲のかかったのを夏の夕飯の時分と見立て、夕立が来るのではないかと待ちながら、戸障子もあけ放した中で、薫風をめながら夕餉をしたためている様子を付けたのである。高い山にかかった夏雲に快い風、その気分は自ら通っている。

(転じ) 前句の大きな景色から一転して庶民の生活、それも貧しい夕餉の風景に転じたのはよかったが、大打越の雪、前句の雲にこの付句の風と、天相の語が続きすぎた感がある。

(補説) かますごは関東で言ういかなご、こうなごである。和漢三才図会によれば、かますごは「凡そ春分の時撰州一谷に始めて多く之を取る。立夏播州明石浦、鹿瀬にて盛に之を取る。夏至の前後、讃州八島及下関にて之を取る。

たのであろう。かますごもこうなごもいかなごも旧い歳時記には記載されていない。だから、凡兆がかますごの季を無視しているのもあるいは当然かも知れない。現代の歳時記では晩春の季語である。

ゆふめしにかますご喰へば風薫

蛭の口処をかきて気味よき

兆 蕉

(現代語訳) すがすがしい風が吹いてくる中、かますごで夕食をたべ終り、蛭にくわれて痒いところを搔いていると気持がよいものだ。

(付心・付味) 其人の付け。前句の夕飯を食う人を農夫と見て、昼は終日、田の草取りにせいを出し、夕ぐれに帰って、くつろいでいる景を付けたものである。

「かきて気味よき」が、前句の「風薫る」爽涼の気分でひびき合っている。響きの付け。「芭蕉俳諧研究」の中で、岡崎義恵氏はこの句に言及して、「此句を芭蕉の付味の典型的なものとしてみると、ひびきと呼ばれるものに近いやうに思はれる。感覚的な体験に伴ふ強い感情が中間の媒介を待たずして直ちに二句を聯絡する。前句から付句が生まれる過程も打てば響くというやうな所がある」と述べられ、カ行音を重ねた前句の語音の響まで付句がそのままに受けていると指摘しておられる。

④マスゴ⑤エバ⑥ゼ⑦オル

⑧チドヲ⑨テ⑩ミヨ⑪

(転じ) この巻は三句の転じが鮮かで、発句と脇が庶民

一の谷より次第に西海に至る。其翌日更に之無も亦一異なり」とある。一方、風薫は現在の歳時記では三夏に入られ、よく、「風薫る五月」などと用いられて、むしろ初夏的な感じがするが、芭蕉時代の歳時記によれば、大よそ旧暦の六月、たとえば「俳無言」などには「扱、六月には風薫ると云也」とあって、現代の暦で言えば七月か、八月頃の風をさすことになる。そうなると、摩耶山麓の村々に風薫る六月には、その近海一谷ではかますごは取れない筈になる。このかますごは生のものか干したものか。時季的に言えば、これは干したものを食べているように思われるが、折口信夫氏は「かますごは関東のこうなご、いかなごの干さぬものである。口の中で生臭くて、新鮮のようで生ぐさい。田舎のちくわを食うと、臭い感じがするが、かますごを原料にするためだろうか。酢醬油で食う、げすのげすの魚だ。それだから俳諧的である。」(折口信夫全集ノト篇第十六巻)と言っている。折口信夫氏は大阪の生まれであるが、かますごの取れる時季については知らなかったのだろうか。これはおそらく、この句の作者凡兆も同じだっ

的な気分、第三と四句目は富裕なゆったりした気分、五句目と六句目が優雅な気分、七句目、八句目は雄壮な気分、九句目とこの十句目はまた庶民的でありながら、さわやかな気分と、右の推移がきわめてはっきりと、また自然に行なわれている。

(補説) 蛭の口処は蛭に食われた跡。蛭は夕立、また水田などと付合語(類船集)、だから、当時の人は蛭と聞けばすぐ田植、又は田草取りを連想したのであろう。ことに前句に風薫る(季夏)があれば、当然、田植ではなく、暑い最中の田草取りの辛労を思いおこすに違いない。そして、その辛労から解放されて、蛭の食い跡を思う存分に搔くのが、いかに楽しく、気持がよいことが想像されたであろう。因みに口処には、クイド・クチド・クドコと三通りの訓みがあったらしい。このうちクドコと訓んだのは「附合考」だけである。クイドは食処という字をあてるのが本来であったらしいから、口処はやはりクチドと訓むのが正しいように思う。

蛭の口処をかきて気味よき

ものおもひけふは忘れて休む日に

水 蕉

(現代語訳) ままにならぬ恋の思いから解放されて、今日だけはゆっくり休み、思いのままに蛭の食処の痒いのを搔くことができ、気持がよいことである。

(付心・付味) 其人の付け。日ごろの悶々の情を忘れることのできた気分と、むず痒いところを思う存分搔くこと

のできた気分とがうつり合っている。

(転じ) 打越の「ゆふめしにかまずご喰へば風薫」も人情目の句、この「ものおもひけふは忘れて休む日に」も人情目の句で、転じがないようにも見えるが、一方は男性の生活そのままの描写であり、これは女性の恋の句とすぐ連想されるから、そこに自から転じが見られる。

(補説) この句の解釈には次の大体三通りの説がある。

① 百姓女が、たまの休み日に、つれない男の姿を見ず、しばらくは恋を忘れていた姿。

② 奉公している女性が、今日は暇をもらって里に帰り、平素の恋の悩みを忘れていた姿。

③ 勤めを休んだ宿場女郎が、凝った肩の血を蛭に吸わせて、平素の気苦労を忘れていた姿。

まず、この女性がなぜ蛭に食われたかについて、④ 水田や河川で蛭から食われたのか、⑤ 治療用の蛭に食わせたのかの二つから決めて行きたいと思う。さきにあげた「類船集」にも、蛭に対し腫物という付合語があり、蛭を治療のため使うことは、当時から行なわれていた。しかし、治療用に蛭を使ったからと言って、それをすぐさま宿場女郎、あるいは飯盛女の類と見るのは早計ではあるまいか。それはこの巻名残の表の恋句に、「旅の馳走に有明しをく」・「すさまじき女の智恵もはかなくて」として、宿場女郎、飯盛女の生態が描かれているが、歌仙一卷の中で宿場女郎の恋が二ヶ所に出てくることはまずないと見るべきであろう。

①の百姓女と見る説は、古くは「付合考」に「賤の女の人目をしのぶ山里の恋はわりなき習ひにて、今日は農業に出ねば、つれない男の顔を見ず、しばしは恋を忘るるならむ」とあるが、これはもちろん、この女が水田の作業中に蛭に食われたと見てのことであろう。だが、そうなると、三句続きで山家の草深い環境が想定されることになるであろう。大方の註釈書は②の説である。この説にも、たまたま宿下りの女が農事を手伝って蛭に食われたあとを掻いているのだという考え方と、この女は瀉血用に蛭を用いたものとする説がある。はじめの説は①に極めて近く、やはり打越・前句の境地に近いように思う。

それで私は一応、この女性を奉公に出ている女が、何かの理由(多分、恋の悩みが絡んでいると思われる)で、宿下りして治療のため蛭に血を吸わせたものであろうと思う。ところで、「芭蕉句集」(日本古典文学大系)によれば、前句のはしたない人の気楽さに対して、宮仕えする人の気苦労を対照した迎付(向付)であるとしている。しかし、自の句の向付が成り立つには、その両句とも自とも他とも取れる句でないとな立しない。「蛭の口処をかきて気味よき」も「ものおもひけふは忘れて休む日に」も絶対に自としか考えられない句である。このようなものを向い合わせることは無理がある。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第四十五回 猫蓑会

第四十五回猫蓑会は四月二十五日(日)、江東区亀戸天神社事務所、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行奉納し、そのあと二十韻十巻を首尾した。出席者五十二名

第一部 正式俳諧興行「藤祭り」一巻
第二部 二十韻十巻

(一) 役割

宗匠	副島	久美子
脇宗匠	中田	あかり
執筆	内田	麻子
知司	上月	淳子
副知司	小林	千雪
同	原田	千町
座配	梅田	利子
座見	山崎	一恵
花司	市野	弘子
配硯	橘	文子
同	久保田	庸子
同	須田	智恵
老長	式田	和子

(二) 次第

一	席改め
二	席入り
三	配硯
四	献花
五	執筆登場
六	文台捌き
七	知司挨拶
八	俳諧興行
九	花前
十	玉串奉典
十一	花の句披露
十二	端作り
十三	吟声
十四	文台返し
十五	作品奉納
十六	知司挨拶
十七	退席

二十韻 藤祭り

捌・文 副島久美子

正式俳諧数々の御役

風はかなり強かったものの今年七回目の藤祭りは汗ばむ程の上天気の中無事終りました。

振り返れば亀戸の天神祭りはほとんど雨に降られたことがなく、余程猫養会皆さん方の心掛けがよいのでしよう。

それにしても年に二度行われるこの古式ゆかしい正式俳諧は、我等猫養会のシンボルの行事となりすっかり定着の趣きです。

普段は早や日常的に生活の中に取り入れられている連句も、この行事を通して俳諧の連歌の成り立ちや芭蕉時代に今一度思いを馳せるよいよすがとなることと思います。

前回宗匠の御役好敏さんの御都合で急に私にと明雅先生からお電話を頂き又も腰を抜かささんばかりの驚き、思えば花司・香元・副知司・執筆・脇宗匠そして今回の宗匠とお役を頂く度に果して出来るのかしらと不安の暗雲が垂れこめ右往左往する私でしたが、明雅先生始め奥さま、秋元さま、式田さま方に励まされお導き頂いて何とか今日に到ることが出来たのだと感無量のものがあります。

今まで数々の御役を賜り、その都度世にも稀な貴重な体験をさせて頂きほんとうに有難く感謝の気持ちでいっぱいです。

夕暮迫る境内、棚の藤房は未だ思いの外短く、そう言えば今年凍える程の花冷えが幾日も続いたせいかしらと、お連れの方達と話しながらゆっくと家路に向いました。

明雅 和子 弘子 千雪 一恵 智恵 庸子 文子 利子 和彦 美保 和弥 良子 良子 蓉子 久美子 執筆

献盃の酒にほろ酔ひ藤祭り
鐘も霞みて渡る反橋
蚕卵紙未だ黄色くひそやかに
お茶の時間に甘辛の豆
鍵っ子がひとり留守番三日の月
知らない電話切っとうそ寒
初詣のたかぶりのまま抱かれて
週刊文春またもスクープ
犠牲者の遂に出でたるポランティア
麦藁絞のぼかり浮く海
松葉菊崖をびっしり埋めて咲き
ゲートボールに老いもさざめく
苛めたり苛められたり気がもめる
傷痕のこる右の耳たぶ
後期の月淡々と雪の道
旧家の軒に燕越冬
給食も今は好みのバイキング
ハレー連ねとばす高速
花前線追ひかけけふは津軽まで
山の窯場は陽炎の中

二十韻 十巻

藤祭り

東 明雅 捌

藤の豊国

岩井啓子 捌

広前も諸礼停止や藤祭り
逝く春惜しみ一句一直
揚雲雀雲の中より囀りて
新米教師任地遠くに
買ひおきのワンカップ酒ぐいと空け
外寝の恋を攻める藪っ蚊
夏の月淡く残れる後朝に
心も軽く吹ける口笛
江の島の観音様へ坂登る
万歩計つけよいよいの兄
円高は日毎夜毎に募りつつ
狼こはき三峯の邑
呼び返す穴戸梅軒鎖鎌
山賊髭に胸がわくわく
超ミニの女探偵シカゴまで
マリアのお告げ馬廉はおやめと
飛びこゆる溝の深きに月もなし
何はともあれ障子貼りかえ
秋場所は済んで若貴花相撲
鯛を干せる浜の賑ひ

明雅 和弥 杏奈 治子 明雅 和弥 杏奈 治子 明雅 和弥 杏奈 治子 明雅 和弥 杏奈 治子 明雅 和弥 杏奈 治子

藤の風豊国の江戸遊び来て
綾の蝶々よぎる反橋
春厨呼ばはる声の誰ならん
好みのカップ紅茶いっぶく
尾根越へてまた細くなり杣の道
口づけだけで終る短夜
無蓋車の男にやりと月白し
すぐになるかなドルの百円
奪衣婆は三途の川に坐りだこ
泥でこさへた団子並べて
ラグビーの延長試合酒すすみ
ゴロスケホーホ梟の啼く
迷はずに教祖が決めし縁に生き
長瓜のよな彼と彼女と
妊るは五人目の児で秋収
月の射し入る銀細工店
波の音静か静かに寄せ返す。
ロニアに住みて知りし人情
淡墨は我が想ふ花今盛り
毛を刈られたる羊軽々

啓子 好子 庸利 敏子 啓子 好子 庸利 敏子 啓子 好子 庸利 敏子 啓子 好子 庸利 敏子 啓子 好子 庸利 敏子

藤 祭 り

真田光子捌

俳諧の奥

杉内徒司捌

藤祭り大正琴のよく揃ふ
 二礼二拍の東風の階
 焙りたるたたみ鯛をたたみぬて
 ジグソーパズル親子にぎやか
 冬の月電柱の影ながながと
 霜焼の手の恋知り初めし
 先斗町うなじをはたくぼたん刷毛
 道聞く外人何語なのやら
 懸案の領土問題後まはし
 あまりでかくて噛めぬ鉛玉
 海坊主浴衣着てゐるやうなひと
 チェリービールの泡がいつぱい
 夢にまで求めし愛のステータス
 芦火に燃ゆる胸乳ま白き
 落城の姫のたどりし里の月
 割りし胡桃の中はみ佛
 半生をただ床柱拭いて来し
 自転車で行くホームヘルパー
 アルプスの山脈のぞく花の隙
 春のしらみを写す画用紙

梅田

光利子
正江子
淑江子
紀江子

江代利紀利江紀利代紀利同代江利子代江子

俳諧の奥究めたし藤祭
 茂みにひそと卵抱く鳥
 朗らかにぶらんこの子ら歌ひぬて
 紙芝居とてどっと集まる
 汗のシャツ手を借りて脱ぐ窓の月
 尺取虫が卓上を這ふ
 香港のげてもの喰ひを自慢せん
 男に惜しき唇のいろ
 好き嫌ひ進路変更ままならず
 第三夫人に茶の湯教へる
 鱈起し越の海岸さわめきて
 水柱のすだれボキボキと折り
 跡継ぎが父の鬚剃る理髪店
 はやくも「のぞみ」故障統出
 月中天夜勤帰りのコップ酒
 秋場所ビデオ繰り返し見る
 ひよんの実を難なく鳴らすおぢいちゃま
 煙管髻袴脊負子草鞋
 地下出でし電車まばゆき花の駅
 友と仰ぎぬ麗かな空

徒美冬千

司保乃雪乃保乃雪乃保乃雪乃保

藤 浪 や

杉江杉亭捌

神 の 庭

副島久美子捌

藤浪や空に抜けたる青甕
 亀鳴く池に朱の反橋
 春炬燵逆引辞典繙きて
 ファミコンゲーム熱中の子ら
 夏の月工事の進むビル照らし
 暗闇祭誘はれし幸
 よろけ綺似合ひて母に似たるひと
 犬の足跡続く砂浜
 両替機賃の諭吉にしてやられ
 息つめて待つ「ダア」か「ニエット」
 ベーチカでウォッカ呻る赫ら顔
 複合不況家計底冷
 付文を何度出しても知らぬふり
 ままよと許りおみくじを引き
 梢越し無情の月を打ち眺め
 夜寒をかこつ定年の父
 正調の江差追分鮭番屋
 話のつづきふるさとのこと
 夢かとも上中下の花霞
 校庭の隅揺るるふらここ

杉亭子
達子
郁子
富子
良子
弥子
郁子
達子
郁子
弥子
同子
同子
美子
同子
弥子
亭子
郁子
達子
郁子
弥子

弥郁美同達同美同弥亭郁達郁弥

藤色に染まる池の面神の庭
 亀のどやかに眠る石の上
 世界地図春をルーベでたどるらん
 ファミコンかちゃと鳴らす幼子
 山荘の銃架に凍てし月射して
 脱がしてあげる君の雪沓
 ひとすぢに見つめる瞳底深く
 漢字と忘れ教育実習
 田高ににんまりだんまり輸入商
 籠のいんこが餌を争ふ
 エイトビートソーダ水がリズム打つ
 梅雨雷に傘を又借り
 襲名のおねり仲見世人の群
 穴に入りて怨念の蛇
 冷まじき恋の結末懲りもせず
 月にひもとく西欧の秘画
 再検診中性脂肪過多肥満
 生前葬に酔ひしれる古稀
 片丘の埴輪の馬へ花の散る
 心地よき風渡る野遊び

久美子
千子
寿子
美奈子

哲亭子美奈子哲亭子美奈子哲亭子

藤浪や

橘

文子捌

藤房の

中島啓世捌

藤浪や笙の音ゆるく神の苑

禰宜の袂を反す春風

折紙の蝶様々に作るらん

四角の皿にクラッカー盛る

山の端に上りし月にビール干す

少し汗ばむ肌が気になり

外泊を出張だよと言ひくるめ

商社は武器も豆も買ひ付け

留学の果はナポリの似顔絵師

潮騒の如聞こゆ舟唄

この頃は霜焼の子も見当らず

のっぺらぼうが狐火を提げ

壬生屯所総司にやりとうち笑みて

閨の乱れに拾ふ黒髪

色と欲ふたつながらを責める月

秋場所明けのゲーム三昧

小鳥来る故郷は今過疎のまま

夢を抱きて集ふ若き等

窯出しの壺並べ置く花の下

マイクロバスの残す陽炎

文子

清子

健悟

智恵

良子

清子

良子

悟

良子

恵

清子

同

悟

恵

悟

良子

恵

文子

清子

藤房のゆらぐともなく宮の屋

つどひてのどか甲羅干す龜

道具市納屋の鋤鎌研ぎあげて

お茶受けに出す手焼せんべい

行水の盥にうつる宵の月

浴衣すべらす白き玉肌

知らぬままミスターレディに貢がされ

髭を切られたうちのみけ猫

隊長の訓示ながなが自衛隊

托鉢僧の前は素通り

寒芹の三寸ほどを野に摘みて

のっぺらぼうの振り向きし顔

夫の目を盗みてパリに逢ひにゆき

接吻すれば残り蚊の刺す

月登りそめて始まる夜相撲

力まかせに葛の蔓ひく

石切場いつも鈍音聞えきて

酔へばひとふし故里の唄

しがらみの花塞きとめし神田川

大原女のゆく町はうららから

啓世

路子

弘子

規美子

弘子

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

凡規

藤の彩

中田あかり捌

藤の花

若尾よしえ捌

垂れ初めし房いとけなく藤の彩

反橋うつす春闌くる池

鳴き音よき飼鷺を賞づるらむ

甘党同志つまむ大福

恋を秘め美し月の巴里祭

ジゴロ気取りのぶんと香水

UCのカード使へぬ店もあり

死ぬに死ねない墓地の高値よ

宇宙服着て旅行する夢を見て

バツハ聴かせて杜氏かもしぬ

そら打てよあっちに出たぞ土竜打

研修医者のこはい点滴

年増には弱味にぎられ有無もなく

眉きりきりとジェラシーの月

引揚者摘菜ばかり食膳に

そぞろ寒さに覗く「鬼太郎」

駅前英語教室繁盛し

定年のひとにきびあるひと

花吹雪勝利投手にふりかかり

遠く近くに霞む山々

あかり

一恵

和子

シズ

子ズ

恵子

恵子

子ズ

恵子

子ズ

同

恵子

恵子

子ズ

恵子

子ズ

恵子

子ズ

恵子

撫牛の眼上げるや藤の花

屋台に並ぶせんべ炒豆

春炬燵電話鳴れども出でかねて

うなる児ひたに折れる折り紙

月涼し七里ヶ浜に影二つ

砂の足跡重ねときめく

ポランティア貯金用紙に押印す

生活保護費使ひ切るべし

旅に生き旅に死したる俳諧師

熱燗酌みて交はず旧交

初場所に念願叶ひ立行司

鳥が増えし東京の森

シャンソンは黒いドレスに腕を組み

むかしや恋文いまはいきなり

藁塚の陰の口づけ月覗く

耳洗ふ如洗ふ平茸

居眠りの夜学子そつとそのままに

開いたままの本は「魔の山」

梢までも花・花・花の花万葉

鐘も霞める蝶の羽化時

よしえ

麻子

隆秀

美代子

志げ子

美え

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

志隆

四句目風執筆

内田 麻子

思えば昨年の藤祭りの日に、この次の執筆を……。との先生の御言葉に、今の女子学生風と言えば、エエッ・ウソー・ホント・シンジランナイと言っ感じでしたが、冷静になって考えますと、私も何時か猫藁の古株となり、気楽な落第生では次の方々の迷惑にもなるし、その任でないことは自覚しながら「死んだ気になってやらせていただきます」と言う様なことを申し上げた記憶がございます。

さて、それからの一年は、何かひとつの責任を持った様で、省みますと又それを心にずっと抱きしめて来た様な気がいたします。(あたかも恋句の様に) 先輩方の助言、ビデオと先生の御指導をいただいて、昨年十月二十一日、第十二回俳諧芭蕉忌には、まことに緊張感そのものの中に何とかお役を務め、あそこは失敗したなど反省しながら一安心して居りましたが、季刊連句三九号後記に「執筆内田麻子さんの落ちついた文台捌に感心した」と明雅先生に書いていた

だいた事は、何よりも嬉しく思いがけないことでした。反面、先生もどんなにか心許なく、この御感想はまあ心配した程ではなかったと言う事なのだと思われたいりしました。

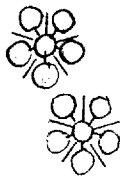
さて、今年の藤祭り、空も晴れて、いよこれで総仕上げと言っところになりましたが、この半年間の間にも人生のさまざまがあり、喪中になられた好敏宗匠が遠慮されたり、知司の淳子さんの病後のお体を心配したり、私七代目執筆は、貫録がないので、和子老長の助言で、和彦、和弥、良弥の生きの良い男性新人達や私の長年の連衆、美保、蓉子両人達に付句に出ていただき、又各御役の方々の美しい所作に助けられ、何とか又務めさせていただきました。しかし家で練習するのはせまいところで、いざ広い場所に出ると練習の甲斐もなくとまとったりして、後悔点となりました。心配だった吟声の方は、会場の音響がよくて、余り声を張り上げなくても、声が届いた様に思いました。

ああ終ったと言っ気持は、養花天の如く半晴半陰なのですが、この一年はこれお役に緊張していた為か、友人達が次々流感に

熱を出したりされる時期も何とかくぐり抜けて、(単にバカは風邪も引かないと言っことかも) 先輩執筆の皆様はそれぞれに、発句、脇、第三の様な格調高い執筆役、私はならば四句目風執筆で行こうと思ったことも何とかなりましたかどうか、年輪的にも限界点のところ、お役を与えて下さった先生と援助していただいた先輩、今回同行の各位に心から感謝いたして居ります。

このお役をつとめて見て、正式俳諧にある格調の高さは、連句の起原のころの堂上連歌からの伝統の香りではないか、貴人、宗匠、脇宗匠、副宗匠の重鎮をいただいて、実質上の捌と進行を司る執筆こそ俳諧のプロでなくてはつとまらぬものと認識いたしました。

三百三十年の昔より咲きつづける亀戸天神の藤房のように、猫藁の連句も連衆が房の如く連なり、伝統の継承と共に、現代に於ける風雅の道を目ざして居ることに、天神の御加護あることと存じました。



藤祭正式俳諧私記

中田 あかり

今年の藤は去年より遅れている。房も短し、房先の蕾は難あられの半分程であつた。ゆっくり花が楽しめるだろう。

風が強いので、藤房の遊ぶ様子が眺められ、何よりも飛びきりの天気である。

猫藁会員五十名その他が集まり、亀戸天神で恒例の正式俳諧が興行された。

平成五年四月二十五日。本日、私は脇宗匠のお役をお受けした。

それぞれのお役について会員は、場に馴れた落付いた雰囲気である。

配役の何と初々しいあしらい方。献花は真赤な芍薬の玉であった。宗匠の「執筆・執筆」の声に、もう一つ忘れられない声の重なるのを感じた。

私、あかりは真面目に脇宗匠の役目を果している。その上でタイム・スリップをしたのである。

柔らかな、良く透る明雅先生の御声は、この同じ場面で宗匠として「執筆・執筆」と呼ばれた。その時、会場に私達に安心感

を与えながら、びりりとしたものが流れるのを知ったのは、私だけだったろうか。

あれからもう何年か経った。私は人の運命の限らない変化と面白さを味わった。

歴代の執筆は各々の持味があつて立派だった。私が凄いなと思つたのは某氏の文台捌。例えば筆を調べる。そして使わぬと決めた筆を置く指が、離れる瞬間まで演じている。

さすがに堪能な趣味をもつ某氏。若し指摘すれば「そんなことありません」と否定されるだろうが、かりにそれが無意識下の意識だったとしたら益々感動。じつと拝見していて涙ぐみそうになったことがある。終ったあとも続くのだと。

亀戸天神は私にとつてなつかしい社だ。正月の初天神と、藤の盛りに必ず訪れた。総武線の始発駅は両国で、両国と秋葉原がつながつたのは私が小学生になる年だった。だから天神様には両国駅迄タクシーでゆく。自動ドアが無かつたから、車には粋なつば付帽子をかぶつた助手が乗っけていて扉をあける。亀戸駅で降りると関八州の香具師が集つていた。

大きな父の掌をつかみ人混みを抜ける。

亀戸天神の太鼓橋には当時階段が無かつた。先ず父が橋の中央で腕をひろげて待つ。小さな皮靴が力いっぱい馳けのぼり胸にとびこむ。二回も三回も繰り返した。藤の香りにむせぶように汗ばみつつ。年端もゆかぬ子に学業成就のお守りを買つた父の想い出が充滿している神社。

水色の袴の運びも見事に、神主が玉串を折敷に奉じて進む。宗匠が天満宮に供え、正式俳諧は終盤に入った。

別室で二十韻興行。十巻が巻かれる盛況に明雅先生の御人徳を感じた。今日を詠む発句が続々と生れ、笑い声がひそやかに起る。連句の醍醐味を満喫しながら巻き進んだ。

「あかりさん」連衆に呼ばれて立ち止る。反橋の快に白梅が一輪反り咲き。閉りの枝には青梅が互いを見較べるようになっていた。橋詰の梅鉢紋の街灯がともった。八重桜は満開。右手奥の白藤の長い房が池面に揺れる。夕暮の気配を帯びた雲は刻々と色を深め、風にちぎれてゆく雲も。振り向くと社拝殿は閉じられた。春と夏のはざまに立ち、私は猫藁の仲間たちと倅せの実体の中に心をさらしていた。

